



日本総代理店・株式会社 フカシロ



樓蘭士

Roland

NO.6

どこでどうなったのか



柴田俊治

どうもうまいかない。
パイプをどうして持ち歩くか——
ポケットに入るとごろごろする。
灰のカスで中が真っ黒になる。とい
って、いつもくわえていると、アゴ
がだるくなる。冬はまだいい。日本
の夏となると、お手あげだ。シャツ
の胸ポケットに逆さにつつこんだら、
ヤニが出てきて、白いシャツに変な
シミがついた。

仕方がないから、手に持つ。すると、
ひょいどこかへ置き忘れるの
だ。

ばくの経験で、いちばんいけない
のは公衆電話だ。

ボックスにはいる。左手に電話番
号をかいたメモか手帳を持ち、かつ
受話器も持つ。右手の指でダイヤル
を回そうとして、パイプをくわえた
ままではしゃべれないのに気が付く。
持ちながらも回せないで、電話器
の横へパイプを置く。通話をする。
これが日本語ならまだ余裕があるの
だが、アチャラ語となると話が通じ
たことに喜んでしまっ、ついその
ままボックスを飛び出してしまふ。

こうして、パリの公衆電話に、パ
イプを3・4本置いてきた。

ローマへ行ったら、男たちが集金
の袋みたいなのを持っている。この
街は、集金人の多い街だと思った。
あとで聞くと、あれは男用のハンド
バッグだった。イタリアの服はカッ
トがびっちりしているので、ポケッ

トにもものを入れられない。そこで、
財布やタバコなどの小物を入れるバ
ッグを持っているのだった。ああい
う小さなバッグにパイプと刻タバコ
を入れたら、とも思ったが、どうも
集金袋みたいなのが気に入らない。
それに、袋ごと置き忘れるのな
ら同じことだ。

パイプは書斎や居間のソファで、
静かにくゆらすべきものなのだろう。
だいたい、われわれのように、街を
歩き回るものが、パイプを吸おうと
いうのは間違いなのかも知れない。
シガレットならこんな苦労はないの
だから。

ばくがたどりついたのは、いたる
ところにパイプを置くという方法だ。
家にも、会社にも2・3本ずつパイ
プを置く。家では家で吸い、会社
では会社で吸う。こうすれば持ち
歩くことがなく、したがって忘れる
こともないという算段だった。だが、
実際にはそう理屈どおりにいかない。
朝、家で吸っていて、まだ煙が残っ
ているうちに出るべき時間がくる。
惜しいような気がして、くわえたま
ま出る。会社からまっすぐ家へ帰る
とは限らない。いろいろな席がある。
その間をどうするか。やっぱりくわ
えたまま会社を出る。

いつの間にか、家に置いたのや、
会社に置いたのや、カバンの底に入
れたのや、ポケットにはいつている
のや、ごちゃごちゃになって、一本



どうも足りない、どこでどうなった
のか………というようなことになる。

これでは、いいものは持てない。
いつ失くすかとびくびくしているよ
り、忘れても気にならない程度の方
が楽だ。ところがあまり安物だと、
すぐにいやになる。ここのところの
呼吸が難しくて、高からず安からず、
自慢にはならぬが、そう見下げたほ
どでもないというのを選ぶ。ロンド
ンに3年在勤したけれど、ゲンヒル

の店には行かなかった。どういうわ
けか、ベルギーで買ったのが多い。

ばくの性に合っていたのだろう。

もう6年ほど前になる。ロンドン
でばくの前任者だった「天声人語」
の深代惇郎君がいった。

「日本の編集局じゃパイプを吸えな
いんだってね」

「いいや、ばくは吸ってたよ」

「きみはデスクだろ。ヒラの記者連
中はね、なんだか偉らそうにしてい

るように見られるんだって」

ばくは気がつかなかったが、そん
な空気があったのかも知れない。深
代君の一周忌に、その話をした。い
までは編集局の若い記者が平気でパ
イプをくわえている。深代君がそん
なことを気にしていたということさ
え想像できないだろう。パイプ党は
市民権を得たということだろうか。

(朝日新聞外報部長)

もくじ

どこでどうなったのか——柴田俊治………	2
パイプタバコのはなし(最終回)——檜崎啓示………	4
ローランドのあるところ………	6
ローランド製品紹介………	8
小説 シガレットの消えた日——蒲公英………	10
読者の広場………	15

企画・編集 小室 寛



パイプタバコのはなし(最終回)

アメリカン・タイプの巻

檜崎 啓示

アメリカの開拓者イメージが髭髯とする
素朴で若々しい男らしいムードの
アメリカン・タイプは世界でいちばんポピュラーで
もっとも広く親しまれているパイプタバコである

このアメリカン・タイプは、世界最大の生産量を誇っており、アメリカ国内における消費量はもちろん、世界各国へ輸出される量も、どのタイプよりはるかに多い。これは、一般の銘柄品のほかに、輸出国で包装されたり、他のタバコとブレンドして包装される「刻」の形で的大量包装の輸出が多いことも一因である。

ところが、イギリスやヨーロッパでは、一部の銘柄を別にしてこのアメリカン・ブレンドはさほど一般的ではない。これは自分たちでつくりあげたタイプをもっているからで、世界的にみれば、やはりこのタイプがもっともポピュラーで、馴染まれているといえよう。

日本では、物心ともに欠乏の極に

あった終戦直後、マッカーサー元帥がコーンパイプを無造作にくわえて厚木基地に降りてきた。文明の匂いを渴望していた当時の日本人は、このスタイルと香りを求めて、パイプスモーキングに走った。放出された米軍用パイプタバコがこれに輪をかけた。

この結果、戦前、イギリスタイプ中心の嗜好であった日本のパイプタバコは、アメリカン・タイプが大幅に伸び、かなり大きな位置を占めるようになった。ここ数年間、ヨーロッパタイプのめざましい躍進で、マーケットシェアこそ減少しているが、なお消費量としては増加を続けており、かなり根強い嗜好がある。

これは、アメリカの開拓者イメー

ジにみられる、飾り気のない素朴さ、若々しく男らしいムードがあり、独特の豊かな香りと軽い味に加え、火もちの良さなどから気軽にスモーキングできるからであろう。

このアメリカン・タイプの特徴は、かならずバーレー種を使用することである。なかには100%バーレー種という製品もある。「ハーフ・アンド・ハーフ」は、もともとバーレー種50%、黄色種50%というところから名付けられた。このように、他の種類の葉タバコとブレンドする場合でも、かなりの量のバーレー種を用いるのが、このタイプである。

銘柄によっては、黄色種のほか、オリエンタ葉、ダークファイヤーキューアード葉、ベリック葉、ラタキア葉、メリーランド葉などがブレンドされる。

アメリカの場合、とにかく自国がタバコの発祥地であるだけに、オリエンタ、ラタキア葉などを除いて、アメリカ産葉タバコを中心に使用することが多い。しかし、メキシコ、ガテマラ、マラウイのバーレー種、アフリカ、タイ、インドなどの黄色種もときとして選ばれ、ブレンドされる。オリエンタ葉は、トルコ、ギリシャ、ユーゴ、ブルガリア産などであり、ラタキア葉は、シリア、キプロス産が用いられる。

これらの葉タバコを、葉肉部と葉脈部(中骨)を分離して別々に加工

し配合する製法と、分離せずにそのまま加工する製法があるが、このタイプでは比較的前者が多い。また、バーレー種がベースといっても、産地や等級、着葉位置などによって、バーレー種としての特徴がかなり異なるので、その銘柄に合うよう、これらをブレンドして使用する。

こうしてブレンドされた葉タバコは、臭み、厭味、刺激、苦渋味などのなまのくせを減少させ、香味を良くするためにケーシングソースという香料液に浸漬するか、あるいは、そのソースをスプレーでかける。

そして、十分にソースを吸収した葉タバコはトーストされる。ケーシング・トーストがこのタイプの特徴のひとつであるが、トーストとは、クッキーを作るような加熱装置で、ほとんど水分がなくなるまで、こんがり加熱することである。これによりソースは葉タバコと一体となって、馥郁とした甘いトーストの香りが生まれ、味もマイルドになってくる。

それから、再び14~15%程度まで水分をもどしてから「刻」にするが、このタイプの場合、ダブルカットといって、まず一方を刻幅でカットし、ついで90度回転してもう一度カットするグラニュレートとか、キューブカットが比較的多い。スモーキング・ミックスチュアのように、ラタキアやレディラブドなど、別に加工し

た「刻」をさらにミックスするものもある。そして、個性的なフレーバーをスプレーで加えて仕上げるのである。



ケーシングソースには、バーレー種の香味にいちばんよくマッチするココアをかならずといってよいほど用いるほか、メープルなど、果実や草木のエキス類、砂糖、グリセリンなどのうちからブレンドして使われるのが普通である。フレーバーには、

アロマチックで、周りにも芳香がただようような豊かな香りをもたせるため、各種の精油やエッセンス類が選ばれ、アルコール、グリセリンなどとともに用いられる。

最近、よりアロマチックタイプへの嗜好がかなり強まっていることから、さらにスイートな個性的香りの銘柄が増す傾向にある。

刻幅は1.5~3ミリ、刻の長さは3~2.5ミリとカットのしかたによって異なっているが、水分は14~16%が一般的である。

アメリカン・タイプはグラニュレートというイメージが多いが、シャグ、プラグ、ロングカットなどもあり、また西部劇などでよくみかけるROLL-YOUR-OWNによる楽しみ方も結構多い。

このタイプは、バーレー種が気孔性に富み、香料を吸収し易いという特性を生かし、バーレー特有の香味をうまくアレンジしたものである。そして、アロマチックで個性的な香りの強い、軽快で緩和な、燃焼性の良い、ややホットな煙のパイプタバコである。したがって、特にビギナー向きのタバコであるだけでなく、レギュラーにとっても、きどらないラフさの中に、豊かなムードとセンスのあるパイプスモーキングが楽しめるタイプである。シェアの高い国産の「ロックンチュア」は、このタイプのグラニュレートである。

Roland

のあるところ

ローランドはフカシロが自信をもっておすすめするパイプです。このローランドをおもてめになりたい方は、これからこの欄で紹介する各地のお店へおいでください。でも、ここだけではありません。ローランドはほとんどの喫煙具店で販売しておりますから、おついでのとくに寄ってローランドを手にとってみてください。きっとご満足いただけると思います。



盛岡 川徳

盛岡市で唯一の百貨店で、パイプコーナーには初心者からマニアまでの商品を品揃えして幅広い客層に好評。とくにローランドは圧倒的な支持を受けている。



新宿 加賀屋

パイプ専門店として全国に知られており、支店も各地に続々と誕生している。店内はとこせましとパイプが並べられ、おどろける人の目をあきさせない。ここではとくにスタンウエルが好評。



京都 藤井大丸

京都の中心地四条通りにあり、特にヤングを楽しませる売場作りでローランドパイプが好評。スタンウエルの他、内外有名ブランドも豊富にとりそろえ、パイプメイトを充分楽しませている。



名古屋 オリエンタル中村

1階たばこサービスセンターの横にあり世界の有名パイプを厳選して揃えています。特にローランド、スタンウエルに人気があり、初めての人でも親切に喫い方をおしえてくれる。



広島 三越

ヤング及びオールドファンに満足の出来る個性ある商品を幅広く陳列し中でもローランド、スタンウエルは好評。そしてパイプ小物商品も数多く揃え、パイプを通じてお客様との交流を大切にしている。



大分 トキハ

大分県下唯一のパイプ売場をもち、ローランドを始め、スタンウエルが根強い人気。隣接地、国際観光都市(別府市)を商圏にひかえ、最近とくにフリーハンドパイプが好評。

Made in Denmark



ROYAL DANISH



「これからパイプを始めてみようか」そんな初心者のために、スタンウエル社が製作したパイプです。スタイルは、スタンウエルとほぼ同じですが、手ごろな価格で初めての方はもちろんのこと、パイプにうるさい方にもご満足いただけることと思います。仕上げは独特な3種類があります。どうぞあなたのお気に入りをお探してください。

ローヤルダニッシュ

- マホガニー.....5,000円
- ポリッシュ.....5,500円
- マット.....6,000円

ポーチ



パイプスタンド
パイプレスト



パイプの
お手入に



パイプ



シガレット
ケース



ライター
灰皿



ハッカホルダー
シガレットホルダー
小マドラスラフトップ



たばこジャー





＜イラスト・有元健二＞

1988年、地球上から有害シガレットは消え、世界はふたたび無害のパイプタバコとシガーの時代に戻っていた。1982年にシガレットの有害性は立証され、83年には日本専売公社も解散し、日本タバコ株式会社になっていた。この現実には、1977年の記憶しかない専売公社の試喫員が体験した奇妙なエピソード……

＜1＞

いつものように地下鉄虎ノ門駅で降り、迷路のようないくつもの曲角や階段を千場伊太郎は歩いていった。しかし、いつもの昇り口は工事中でふさがれていた。ただ、その横に人ひとりがようやく通れるスペースがあり、そのむこうが明るくみえた。千場は無意識のうちにそこを歩いて外へでた。そして、通い慣れた

オフィスまでの300メートルを、あたりの景色を眺めることもなく歩いていった。——
いつものようなテストの仕事だった。ずらりとならんだ仕切りの中に坐り、白い壁にむかって、サンプルタバコを試喫し、採点する。その姿は、さながらドアのない共同便所に入っているようなので、テストたちは一様に〈ラバトリイ〉とよん

でいた。

ところが今日の試喫は、いつものようなシガレットではなくて、パイプタバコだった。千場は、シガレットが喫いたかったのになあ、とちょっと思ったが、すぐ気をとり直して試喫をはじめた。

テストNo.1を開け、匂いをかぐ。それから使い慣れたパイプにタバコを詰め、火をつけ、2、3服喫う。喫

味、そして燃焼時の香りなどを採点表に記入する。……

1時間後、千場はNo.1のテストを終え、ひと息入れるため、部屋の隅のソファに坐った。無性にシガレットが喫いたくなった。ポケットをさがしたがない。隣りでリトルシガーを喫う同僚に「シガレットをもってない？」ときいた。

きかれた同僚は一瞬とまどいの表情をみせたが、すぐに笑顔になり、千場のうしろを指さした。ふり返ると、サンプルケースの中にガラス瓶に入ったシガレットがずらりとならんでいる。ガラス戸にはなにやら貼紙があったが、気にもかけず、把手をつかんで開けようとした。

そのとたん、千場の指を強い電流が流れ、掌がびたりと把手の金属部分に付着してしまった。同時に、けたたましい警報ベルが鳴った。あわてて掌をひきはがそうとしながら、あらためて貼紙を見ると、

《有害シガレットは生命を奪う！》
《危険：エレキバリア常時通電中》
などの文字がはっきりと読めた。

「まさか、ほんとに手を触れるなんて……」と叫ぶ同僚のあきれ顔。パイプやシガーをくわえたまま〈ラバ

トリイ〉からふりむいて、こっちを見ているテスター達の奇異の目。しかもその半数は、なんと女性だった。「きみらはだれた。なぜ女がパイプやシガーをくわえてタバコの試喫なんかしている。それに、どうしてシガレットが危険品扱いなんだ。今は1977年で、ここは日本専売公社本社4階のテストルームだろう？」

最後の言葉は彼自身にむけていていた。なにか、その場の空気がおかしいことに気づいたからだ。

警備員がきてスイッチを切ると、警報ベルも止み、千場の掌もはなれた。肩先きまでのしびれをもみほぐしながら、彼はなおもしやべった。「ぼくはただ、シガレットが喫いたかっただけなのに……」

「シガレットは5年前の1983年に有害と断定され、消えてしまった。そのサンプルケースのいちばん右にあるのが、日本専売公社最後のシガレットだよ」

見知らぬチーフらしい男がそういって、またサンプルケースを指さした。見るとそのガラス瓶には1983年製造とあった。

「今は1988年、ここは日本タバコ株式会社。シガレットの消えた83年に

専売公社は解散して、その1部がこうなっている。きみも知ってるはずじゃないか」

「そんな、冗談じゃない。専売公社がなくなるなんて……シガレットが消えてしまうなんて……」

千場は激しい目まいに襲われた。次の瞬間、部屋全体がぐるぐるまわりはじめ、彼は気が遠くなるのを感じた。——

＜2＞

次に千場伊太郎が意識を戻したのは、5階の診療室の固いベッドの上だった。

「気がつきましたか」——むこうのデスクでカルテを書いていた女医が声をかけてきた。「今のあなたにすれば、いきなり11年後の世界へとびこんだようなものですから、驚かれるのも無理はないでしょう」

「すると、やはり今は1988年……」「外をごらん下さい。11年前とはだいぶ違っているはずです」

千場は立ち上って窓に寄り、ブラインドを上げた。

たしかにそれは、1977年の公社5階から見た風景ではなかった。真向いの霞ヶ関ビルこそ同じ形だったが、周囲には新しいビルが林立し、さな

がら外国の都市を見るような思いだった。76年に移転した旧アメリカ大使館の古ぼけたビルは総ガラス張りの高層ビルに変わり、特許庁の古い建物は白っぽい真四角なビルに変わっている。公社の前庭だったところを高速道路が走り、さかんに車が行き交っていた。そういえば車の型もかなり変っている。

この現実が1977年のものでないことは、もはや疑う余地がなかった。「私は日本タバコ株式会社になってからここにきたので、77年の風景を知りませんが、5年前とくらべてもだいぶ変わっていますわ」

女医は彼にソファに坐るようにうながすと、やさしく微笑していった。「有害シガレットはありません。パイプタバコかシガーです」

テーブルの上には2個のボックスがあった。そのひとつを開くと、小型のクレイパイプが数本とタバコの刻みの入ったガラス瓶があった。

「接待用には使い捨てのリトルクレイが便利です。こちらはシガー」

もうひとつのボックスは簡易調湿器になっていて、いろいろなシガーがならんでいた。

「なぜ、なぜシガレットはなくなっ

たのですか？」

千場は試喫室で電流にしばれたときからの疑問を口にした。

「あなたにそれを説明するのはとてもむずかしいので、適当な資料をみ



つけておきました。これを読んで理解してください。——私はこれから会議にでますので失礼します」

そういって女医は1冊の雑誌をテーブルにおいてていった。きれいなカラー印刷の〈ジャパン・タバコ

・マガジン〉1988年3月号だった。それは77年ごろ、ときおり見ていたアメリカの〈タバコ・インターナショナル〉や〈タバコ・レポーター〉によく似ていた。ページをめくると巻頭に論文があり「シガレットの消えた日」という題がついていた。

〈3〉

『1988年1月、スイスのジュネーブでWHO(世界保健機構)の常任理事会が開かれた。会議後の記者会見で同タバコ分科会は、1987年の1年間に、世界各国で〈有害シガレット製造の違法行為〉は1件もなかったと発表した。

これで、地球上からシガレットは完全に姿を消したことになる。1880年代、突如タバコの歴史に登場したシガレットは、またたく間にパイプタバコやシガーを押し、タバコの王座に君臨したが、ちょうど1世紀の華やかな生涯を終えると、現われたと同じように突然姿を消した。そして、世界のタバコは再びシガレット出現前のパイプタバコとシガーの共存時代に戻った。

シガレットの有害性が決定的に立証されたのは、1982年、統一ドイツのドレスデン大学のシュナイダー・

グループによる「パルプ燃焼時の発生ガスに含まれたガン誘発物質—3Nピレン」の発見ゆえである。

ライスペーパーが燃えるときに発生するガスに、ガン誘発物質が存在していた。つまり、シガレット喫煙による肺ガンの発生原因は、それまでいわれていたようなニコチンでもタールでもなく、巻紙だったのである。シュナイダー博士の論文の言葉を借りれば「タバコの煙に含まれる8%の粒子相の6%を占めるタールではなく、92%のガス相の2%でしかない3Nピレンが肺ガンを誘発していた」わけである。

シガレットの消えた現在から考えれば、それは消えるべくして消えたといえなくもない。1940年代から急激に増加したフィルターは、両切タバコよりも喫煙者に強い吸引を必要とさせたため、3Nピレンを肺の奥深く送りこんだ。そして、それが統計学者の指摘するところとなり、1960年代には早くもシガレット喫煙と肺ガンの因果関係が云々された。

(ただ、このときシガレット喫煙を健康に有害だと決めながら、無害であるパイプタバコやシガーとの根本的な違い、〈紙〉の使用、未使用につ

いて、だれひとり着目しなかったことは残念でならない)

すると、タール元凶説を頭から信じて疑わない世界のシガレット産業は、従来の製品のニコチン、タール量の減少に力を入れ、さらに低ニコ低タールの新製品を次々に開発して市場に送りこんだ。

この背景には、まず大量生産方式を確立している巨大なシガレット産業としては、フィルターによる緩和化がもたらした大量消費時代の夢が忘れられなかったこと。ついで、いくら消費者がパイプタバコやシガーを望んでも、経済合理性の視点からみれば、とてもシガレットほどの採算効率がなかったことの2点があげられよう。

かくして、タバコとしての限界点ぎりぎりまでシガレットを追いこんだ結果は、明らかなシガレットばなれ現象の発生である。1980年にアメリカのカリフォルニア大学コーネル博士は、すでにこれを「シガレットの自殺的行為」と指摘していたが、まさにその通りだった。

そして、1982年のガン誘発物質3Nピレンの発見である。WHOは世界各国政府にシガレット製造の即時

中止を要請した。——』

〈4〉

論文はまだ続いていたが、千場は目をなした。シガレットが消えたことが、実感として納得できたからだ。混乱時の様相はだいたい理解できる。パイプタバコやシガーの買占め……シガレットの巻紙をはがして刻をパイプに詰めて喫う人々……パイプの絶対的な品不足からくる暴騰……シガレット工場の操業停止、労働争議……

だが、そんな中で専売公社はどうなったんだろう。千場はもう1度雑誌を手にとり、その箇所をさがした。

『……こうして日本専売公社は、1983年3月31日付をもって解散となつて、翌4月1日から日本タバコ株式会社が発足した。

すでに80年にはタバコ販売は自由化となり、だれもが世界中のタバコを自由に輸入でき、販売もできるようになっていた。また、同年原料葉タバコも専売制をはずされ、政府が保証して適正価格での買上げを行っていた。だから、解散時の専売公社の機能は製造部門だけであり、いつでも民営移管ができる体制になっていたのである。

1975年ごろ、4万人もいた職員も販売、生産部門の専売廃止にともない関連会社に吸収され、83年の解散時には半数の2万人になっていた。そして、5年後の現在、さらに進んだ合理化で1万人を割るまでになっている。

1分間に5,000回転までいったシガレット巻上機は、シガー巻上機に改作されたが、上巻葉の供給に難点があり、現在でも毎分100本以上には至っていない。また、パイプタバコはブレンド技術の遅れから、87年の実績でも輸入品に及ばないのが現状である……』

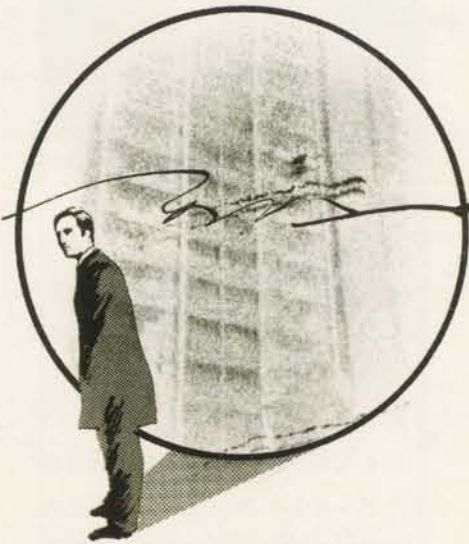
千場は、自分の職場をとりまく周囲の環境が、激しく揺れ動いていたことをあらためて知った。それなのに、自分ひとりとは「ラバトリイ」の白い壁にむかって、毎日試喫をくりかえしながら、なにも気づかなかったとは……いや、もしかしたら、オレはそのことを気づきたくなかったのではあるまいか。——

<5>

それからしばらくして、千場伊太郎は診療室から自分のデスクへと戻った。女医は彼の症状を、1時的な回帰願望で、同じ仕事を長い期間続

けている職種の人に多い、とくにここでは、専売公社時代の人にね、といつて笑った。11年間の記憶は2、3日もすれば徐々に回復するだろう、とも。

しかし、同僚と思っていたのは、どう見ても見知らぬ男や女たちだっ



た。それにあんな騒ぎをおこした後だけに、むこうも別世界の人間を見えるような目をむけてくる。彼は早く記憶をとりもどさなくては、と焦った。

退社時間になった。そのころには千場も落ち着き、家へ帰れば、妻や

子供の顔をみれば、失われていた記憶もよみがえり、1988年の現実にとけこめるだろうと思った。

外へでて、あらためてあたりを見えておどろいた。それは彼の記憶にまるでない見知らぬ街だった。千場は地下鉄虎ノ門駅までの300メートルを、まるではじめてきた異国の都市を眺めているような思いで、ゆっくりと歩いた。駅への降り口まできてもう1度ふり返った。

そこには夕闇の中に1988年の東京虎ノ門界隈の風景がはっきりと見えた。それを脳裡に刻みつけてから、1歩1歩階段を降りた。

朝通った工事の横を抜けた。改札口に入る前に、いつものようにタブロイド版の夕刊を買った。そして何気なく日付をみておどろいた。〈1977年(昭和52年)4月1日〉

とあるではないか。千場はハッとしてみよう1度外へ戻ろうとした。しかし、さっき通った工事の昇り口はどこにもなかった。ついに、あきらめて手近かの昇り口から外へでた。そこで彼の見たものは、記憶にもはっきりとある、昨日までの、1977年の虎ノ門界隈の風景だった。(了)



読者の広場

「楼蘭土」1号-3号をぜひゆずって

ぼくが、はじめてのパイプ「ローランド」を買ったとき、「楼蘭土」4号をもらいました。そのしゃれた表紙、カラーページの名画の溢れるような気品などに魅せられてしまい、それ以来、ぼくはパイプ党に入門しました。今、ぼくのパイプは5本ですが、もちろん、みんなローランド。6号がでたら、またローランドを買うつもり。(もう決めたヤツがあるんだから早く6号をだして!) だから、だから、ぼくのローランドパイプのために、ぜひ1号から3号までの「楼蘭土」をゆずってください。お願いします。

(札幌市・岩田文雄・23・会社員)

岩田君、ありがとうございます。(株)フカシロが心からお礼を申し上げます。同様の手紙がたくさんきていますが、このPR誌は発行の都度、全国のパイプ店、パイプ売場などの店頭サービスで、パイプ党のみなさんにさしあげてまいりますので、残念ながら在庫はありません。もし、お手許の「楼蘭土」1号-3号までをゆずってくださるという方がありましたら、当編集室まで送ってください。かわりにローランドパイプを1本返ります。そして、その「楼蘭土」はかならず岩田君の許に届けます。

珠玉のエッセイを楽しむ

毎号掲載されている巻頭エッセイ。まさに

珠玉の掌編といった感じで、楽しく読ませてもらっている。とくに創刊号の森本哲郎さん、3号の早川良一郎さんが良かった。4号の犬養智子さん、2号の乾信一郎さん(なつかしかった!)も悪くはなかったが、5号のおおは比呂司さんは、もうひと息というところか。

とにかく、パイプスモーキングとエッセイは、パイプとパイプタバコのようにぴったりした味があると思う。これからも「楼蘭土」のエッセイを期待してやまない。

(福岡市・善俊夫・53・会社役員)

編集室スタッフの練り上げた企画の人選によるエッセイ、善氏のように味読していただくことは光栄の至りです。今号の柴田俊治さんのエッセイはいかがでしょうか。まさにパイプのエッセイはこれだと膝を叩いていただけることでしょう。

また、新企画の蒲公英氏の近未来小説「シガレットの消えた日」はどうでしょうか。もし、シガレットが消えたら……こうした仮説は、パイプをくわえながら考えるのには、最適ではないでしょうか。これからも次々と掲載していく予定。この小説に関する反響をぜひお寄せください。

1年に3回は少なすぎます

私は女性パイプスモーカー。でもウーマン・リブとは関係なし。だけど、パイプを男のモノと決めつけている某先生のような独善的態度にはダンコ反対。

さて、貴誌「楼蘭土」は毎号楽しく拝見させていただいております。月刊の「パイプかたてに」とは、また違った味わいがある、

ちょうど、すてきなブレンドのパイプを喫ったときのような、豊かな気持ちにさせられます。ただ、何分にも1年に3回の発行では、間が長すぎます。せめて季刊、それから隔月刊ぐらいにまではもって行ってほしいと思います。これは私の主人も同意見です。

(名古屋市・中村美保子・36・主婦)

女性の方からもいろいろとお便りをいただいています。もちろんパイプスモーキングは男だけのものではなく、広く男女両性に愛好されてほしいと思います。わが編集室のK氏などは、涙ぐましくもテレビの「われら夫婦」に出演して、夫婦でパイプスモーキングを楽しむ姿をブラウン管にのせたくらいです。ダレデスカ、それは自分の本の宣伝だろう、なんていう人は——

ところで、発行回数についてですが、まだ当分このペースでいくつもりです。パイプはゆっくりと、あせらずに喫うのがコツです。「楼蘭土」もまだ然り。

裏表紙 カラー写真のパイプ



フカシロの営業所所在地

本社	東京都台東区柳橋1-20-4	(03) 851-9211(代表)	〒111
大阪営業所	大阪市東区京橋1-7(OMMビル11階)	(06) 943-3522(代表)	〒530
名古屋営業所	名古屋市中村区則武町1-12-1(駅西ビル)	(052) 452-6246(代表)	〒453
福岡営業所	福岡市博多区博多駅東1-12-8(加月ビル)	(092) 451-0656(代表)	〒812
札幌営業所	札幌市中央区北一条西8-2	(011) 251-0068(代表)	〒060
仙台営業所	仙台市本町1-10-12(ビル)	(022) 27-2371(代表)	〒980
広島営業所	広島市鉄砲町5の7第2セントラルビル8階	(0822) 27-3060(代表)	〒730

ろらんど

楼蘭土 第6号 禁無断転載

昭和52年3月1日発行

(年3回発行 次号は6月ごろの予定)

発行 株式会社フカシロ

〒111 東京都台東区柳橋1-20-4

TEL (03) 851-9211

企画・編集 小室寛(社)専売事業協会)

デザイン・レイアウト 塚本克信

購読希望の方は郵便にて500円をお送りくだされば発行のつど、3回まで直送いたします。